

I 藤原宮の調査

1. 藤原宮西北隅地域の調査（第36次）

（昭和57年11月～昭和58年5月）

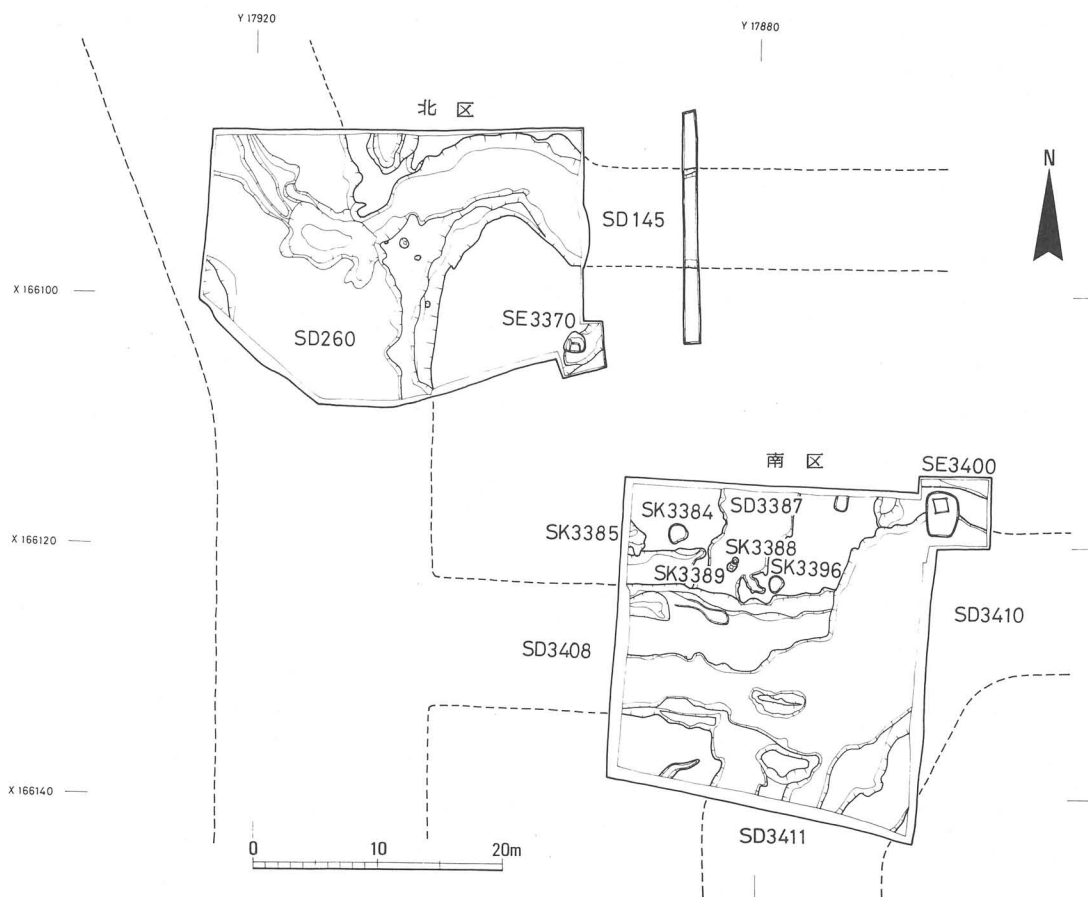
この調査は藤原宮の四至確認調査の一環として、宮西南隅の調査（第34次）に続いて行なったものである。調査区は北面・西面外濠の交点推定地（北区）と北面・西面の大垣と内濠の交点推定地（南区）に設けた。調査区の東および南に近接した地点で、昭和43年に奈良県教育委員会の調査が行なわれているが、宮外郭施設の遺構は確認されず、低湿地の堆積状況であることが報告されている*1。

調査区は標高約65 mの水田で、「ダイゴクボ」という小字名の通り、宮域で最も低地にあたり、現地表面で宮西南隅より約7 m、北面中門より約2 m低い。堆積土は耕土・床土下に遺物包含層（北区で暗褐色土、南区で暗灰色砂質土）があり、その下は自然堆積土の赤褐色砂質土・黄褐色砂質土となる。赤褐色砂質土は、北区の東北隅及び南区東南隅に一部残るのみで、遺構は黄褐色砂質土面で検出した。南区では黄褐色砂質土の下層が青灰色粘質砂土で、それ以下は砂層と粘土層との互層をなし、北区でも砂質土が厚く堆積している。

検出した遺構は井戸、濠、土壇などで、藤原宮期から奈良時代、平安時代、中世以降にわたる。また南区では自然河川流路を検出した。

藤原宮期の遺構

藤原宮外郭施設の北面外濠・西面外濠がある。北面外濠 S D 145 は西流する素掘りの東西溝で、幅 7.5 m、深さ 1.7 m をはかり、北面中門位置での幅よりかなり広くなる。西面外濠 S D 260 との合流点から東に約 16 m 検出したが、この間は直線をなさず、北へ大きく湾曲する。合流点から約 10 m 付近で 4 m ほど北上している。調査区より東方へは直線状になることは東側の拡張区で確認した。濠の湾曲する理由は不明であるが、合流点部分であることによる施工上の



第1図 第36次調査遺構配置図(1:600)

何らかの意図があったのかもしれない。濠の堆積土は大きく3層にわけられる。下層は暗灰色砂質土、中層は暗灰色粘質土で、両層ともに藤原宮期から奈良時代前半の遺物が多く出土した。特に奈良時代前半の土器類が多量であった。上層は茶褐色土で、平安時代初頭の土器が含まれている。このことは、奈良時代前半頃に溝がほとんど埋没し、流路としての機能は失われ、その後平安時代に入って、上面まで埋め立てられた状況を示すものであろう。

西面外濠SD260は北流する素掘りの南北溝で、約21m分検出したが、西岸は調査区外となる。後述するように、後世まで水路として使用されていたため、溝幅は大きく広がっている。幅17m以上、深さは1.5mで、SD145と合流した後、流路を北西方向に変える。堆積土は大きく3層にわけられる。下層は暗

灰色粘土混りの灰色砂層，中層は暗灰色砂質土，上層は暗灰色粘質土である。下層は藤原宮期から11世紀代，中層は12世紀代，上層は13世紀代までの遺物を含んでおり，S D 260 が宮廃絶後も，中世に至るまで，水路として存続していたことを物語っている。

奈良時代の遺溝

S E 3370 は北区東南隅で検出した方形横板組の井戸である。径約 1.5 m の円形に近い掘形の中に，一辺 0.8 m の井戸枠を据えるが，南辺を省略し三辺しかない。北辺の東西に隅柱をたて，7～15cmの幅の狭い転用材を横板として使用している。北辺では8段，東・西辺で9段残り，深さは1mである。井戸枠内からは多量の奈良時代前半の土器類の他，漆塗柄の刀子などが出土した。

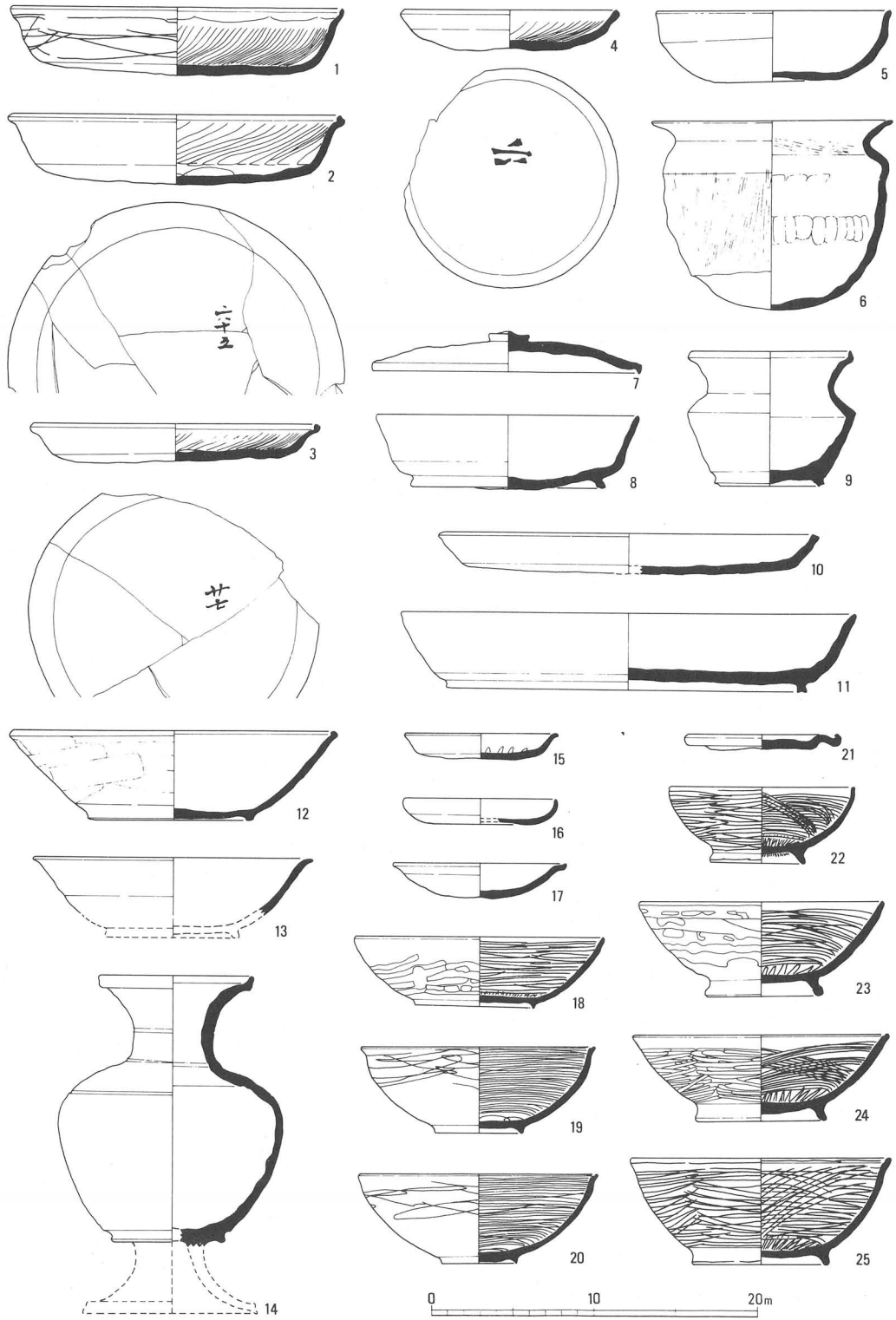
平安時代の遺溝

井戸，土壇がある。南区東北隅にある井戸 S E 3400 は一辺 1 m の方形横板組である。方形の大きな掘形の北側に寄せて井戸枠を据える。四隅柱に縦方向の溝を削り，これに，両側面を外側から斜めに削った横板を落とし込む。横板は幅 15～30cmで，5段残り，深さは 1.2 m である。東辺は外側から横棧を一本，釘で打ちつけ，さらに南東・北東の隅柱部分に補助材をたてて横板をとめている。井戸枠内から出土した遺物には木簡 2 点の他，削り掛け，横櫛，曲物，銭貨（富寿神宝），土師器杯，灰釉碗などがあるが，量的にはごく少ない。

土壇 S K 3384・3385・3388・3389・3396 は南区の河川北側にある小土壇で，12世紀後半～13世紀前半に属する土器類が出土した。S K 3384 は径 2 m，深さ 0.9 m，S K 3396 は径 1.1 m，深さ 1.1 m の円形土壇である。S K 3388 は径 38cm の円形曲物を埋めた小土壇で，S K 3389 と重複し，これより新しい。また両者は南北河川 S D 3387 の底面で検出し，これより古い。S K 3385 は調査区西端にかかる不整形土壇である。

自然河川流路

南区の大半が河川流路にあっていた。三方向の流路があり，南からの河川 S D 3411 と北東からの河川 S D 3410 が合流し，西方へ流れる河川 S D 3408 となる。S D 3410 の北岸に井戸 S E 3400 が掘り込まれており，河川の形成が平安時

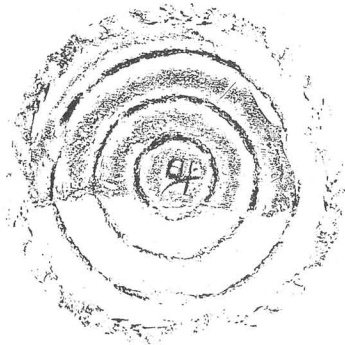


第2図 出土土器 (1:4)

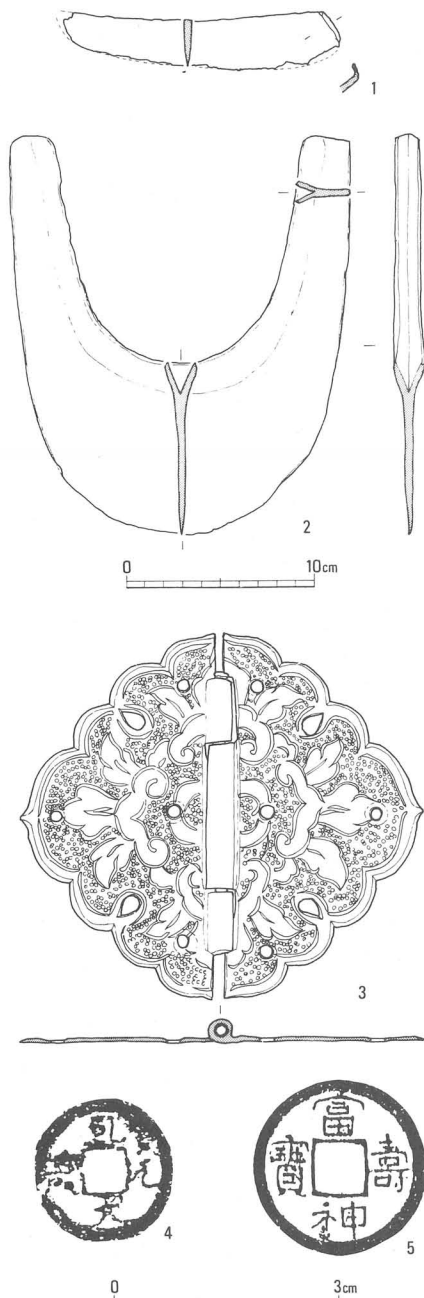
代初頭以前に遡ることは明らかである。河幅はSD 3408が約11 m，SD 3411が15 mで，深さはともに約1.6 mである。流路岸に何ヶ所か立ちぐされの広葉樹の木株が残存していた。堆積土は大きく3層にわかれ，下層は暗灰色粘土と暗灰色砂との互層，中層が暗灰色砂質土，上層が暗灰色粘質土となる。下層には藤原宮期から11世紀代，中層には12世紀代，上層には13世紀代に属する遺物が含まれ，SD 260 と類似した状況を示す。さらにSD 3408 とSD 260 とからは同一個体の緑釉陶器花瓶（第2図14）が出土しているので，平安時代にSD 3408 がSD 260 に注ぎこんでいたことが確認される。SD 3387はSD 3408 に北から注ぐ南北河川で，堆積層はほとんどが小礫であった。この中からは13世紀代の遺物が出土している。

出土遺物

木簡，瓦類，土器類，金属製品，銭貨，石製品，牛・馬骨などがある。木簡はSE 3400から2点，SD 260から削り屑1点が出土した。SE 3400 から出土した木簡は1点が長さ98.2 cm，他の1点が84 cmと大型品である。前者の表裏に700字におよぶ文字が墨書されている。これは，某荘園での稲の出納を弘仁元年（810）10月から同2年2月にわたって詳細に記録したもので，平安時代初期の荘園経営の実態を示す，極めて貴重な史料である。^{*2} 瓦類には多量の丸・平瓦の他，軒瓦，道具瓦（面戸瓦・熨斗瓦），鴟尾片（SD 260出土）がある。軒瓦は80点で，ほとんどが藤原宮期に属するが，SD 3408からは重圈文軒瓦（軒丸瓦6015A・6012型式，軒平瓦6575型式），SD 3410から軒丸瓦6316型式，SD 260から軒平瓦6663 I型式など，少量であるが奈良時代の軒瓦が出土している。土器類には土師器，須恵器，黒色土器，瓦器，製塩土器，施釉陶器（緑釉陶器・灰釉陶器），中国製白磁の他，墨書土器，陶硯，土馬，フイゴ羽口，るつぼなどがある。また少量の縄文式土器，弥生式土器がある。土師器・須恵器は奈良時代前半に属するもの（土師器1～6，須恵器7～11）が多い。また10世紀後半



第3図 軒丸瓦 6015A (1:4)



第4図 金属製品・銭貨

から13世紀前半に属する土師器（16・17・21）もSD 260・南区河川から出土した。黒色土器（18・22～25）は10世紀後半，瓦器（15・19・20）は12世紀～13世紀前半に属するものが主体をなす。SD 260・3408出土の緑釉花瓶（14）は濃綠色釉の硬陶で，10世紀代の製品と思われる。灰釉碗（13）は土師器杯（12）とともにSE 3400から出土した。墨書土器には，SD 145出土の「廿七」・「六十五」，SD 3408出土の「六」など数字を記した土師器がある。木製品にはSD 145から出土した題籤，削り掛け，漆塗盤，藺筒，曲物，SE 3400出土の削り掛け，横櫛，曲物などがある。金属製品はSD 145から鉄鎌（1），鉄釘，SD 260から帯金具，金具類，SD 3408から金銅製蝶番（3），鉄製鋤先（2），金具類，SD 3370から漆塗柄の刀子などが出土した。このうち金銅製蝶番は4枚の花弁をかたどり，表面に鍍金した優品で，正倉院の厨子の扉に類似の意匠例がある。銭貨はSE 3400から「富寿神宝」（5），SD 3411から「乾元大宝」（4）が出土した。石製品にはSD 260・SD 3408出土の砥石の他，弥生時代の石庖丁・石槍・石鎌などがある。牛・馬骨はSD 260と南区河川からかなり多量に出土した。

まとめ

今回の調査により，藤原宮西北隅の状況がかなり明らかになった。北区で北面外濠SD 145と西面外濠SD 260との合流点を検出したことから，宮の西北

隅を確認することができた。北面中門の調査（藤原宮第18次調査）で検出したSD 145と今回検出の合流点を結ぶ、北面外濠の国土座標方眼方位に対する偏れは $W0^{\circ}33'15''S$ となる。外濠は北面・西面合流後、北西方向に流路をとることがわかり、外濠の水処理について新たな知見が得られた。現地形の状況や条坊想定位置などからみて、外濠は宮外周帯を北西に抜け、西二坊大路東側溝へ注ぐことが考えられる。なお、南区に想定された大垣・内濠は検出できなかったが、その存否は河川の形成時期とかわかる。宮造営以前からこれらの河川が存在していたのであれば、外郭施設が外濠のみで、北面・西面大垣がこの地点までのびていないことも考えられる。

また、藤原宮以後のこの一帯の利用状況に関するいくつかの知見を得た。北面外濠SD 145出土遺物のうち、ほとんどが奈良時代前半に属し、西面外濠SD 260でも奈良時代前半の土器類が多い。さらに、外濠近くの井戸SE 3370もほぼ同時期である。このことは、宮廃絶後の状況を考える上で重要な手懸りを与えるものであろう。西面外濠SD 260については、従来の調査結果と同様、宮廃絶後も長期間にわたり水路として使用されていた形跡が認められた。ただ、これまでは11世紀頃まで存続していたと想定されていたのに対して、今回の調査では13世紀に至るまでの遺物が出土している。これは東から注ぐ河川と一体となっていたことによるものと考えてよかろう。調査地の周辺地域は、SD260や、河川流路が13世紀頃に埋没した後、今日見られるような水田として利用されるようになったと推測される。さらに、井戸SE 3400出土の弘仁銘木簡によって、平安時代初期の具体的な土地利用を解明する糸口を得ることができた。この一帯がかなり早い時期に荘園化したことがわかるとともに、今回の調査地に近接した場所に荘所（荘園管理施設）の存在が推定される。昭和43年に行なわれた、今回の調査区に南接した地点の調査でも、平安時代初頭の土器類が出土した井戸が検出されており、今後の調査が期待される。

* 1 奈良県教育委員会『藤原宮跡 昭和43年調査概報』1969

* 2 奈良国立文化財研究所『藤原宮出土木簡(六)』1983.5
「藤原宮西北隅井戸出土の弘仁元年銘木簡」(『奈良国立文化財研究所年報1983』)1983.10

2. 藤原宮西面中門地域の調査（第37次）

（昭和58年8月～12月）

近年、藤原宮西辺部の市街地化が急速に進行している。この調査は、そうした状況下で宮西辺部の遺構を確認し、その遺跡保存に資するために行なったものである。藤原宮をとり囲む大垣には、各面に宮城門が3門ずつ合計12門設けられている。このうちの3門（南面中門・北面中門・東面北門）の調査はすでに行なわれ、その規模・位置が明らかにされている。今回は、これまで調査が行なわれていなかった西面の門のうち、中門を中心とした地域を対象に調査を行なった。調査地区は橿原市立鴨公小学校の北西の水田で、大極殿の西約500mにあたる。調査地区内の土層は、上層から耕土・床土・暗灰褐色粘質土の順であり、その下層面で遺構を検出した。中門の基壇推定位置では床土の下がすぐ地山面である。検出した遺構には、藤原宮の西面大垣SA258、西面外濠SD260、藤原宮廃絶以降のシガラミSX3443、杭列SX3445・3446、橋脚SX3444、井戸SE3440～3442、土壇SK3420～3423、溝SD3427～3430、それに西面外濠が埋没した後、中世に掘られた東西・南北方向の素掘りの細溝がある。その他に溝SD3424・3447～3450があるが、これらは藤原宮造営以前の自然流路である。

藤原宮期の遺構

西面大垣SA258 宮の西面を区画する掘立柱塀の大垣で、西面中門推定位置の南側で4間分（10.64m）検出した。柱掘形は一辺1.5mの方形で、柱間は2.66m（9尺）等間であり、これまでの調査で確認されている大垣の柱間と等しい。西面中門の南側に近い方の柱掘形をイとし、その南をロ・ハ・ニ・ホとすると、柱掘形の深さはイ・ロ・ハ・ホが60～70cm、ニが20cmを測る。宮西南隅地域での大垣柱掘形は1.2mほどの深さであり、本来はもっと深かったと推定されるので、西面中門付近の宮造営当時の地表面はかなり削平されたものと考えられる。イ・ニの柱掘形には柱痕跡（直径43cm）、ロ・ハ・ホの柱掘形には柱を西側に引き抜いた柱抜取痕跡がみられた。イの柱掘形の底には直径

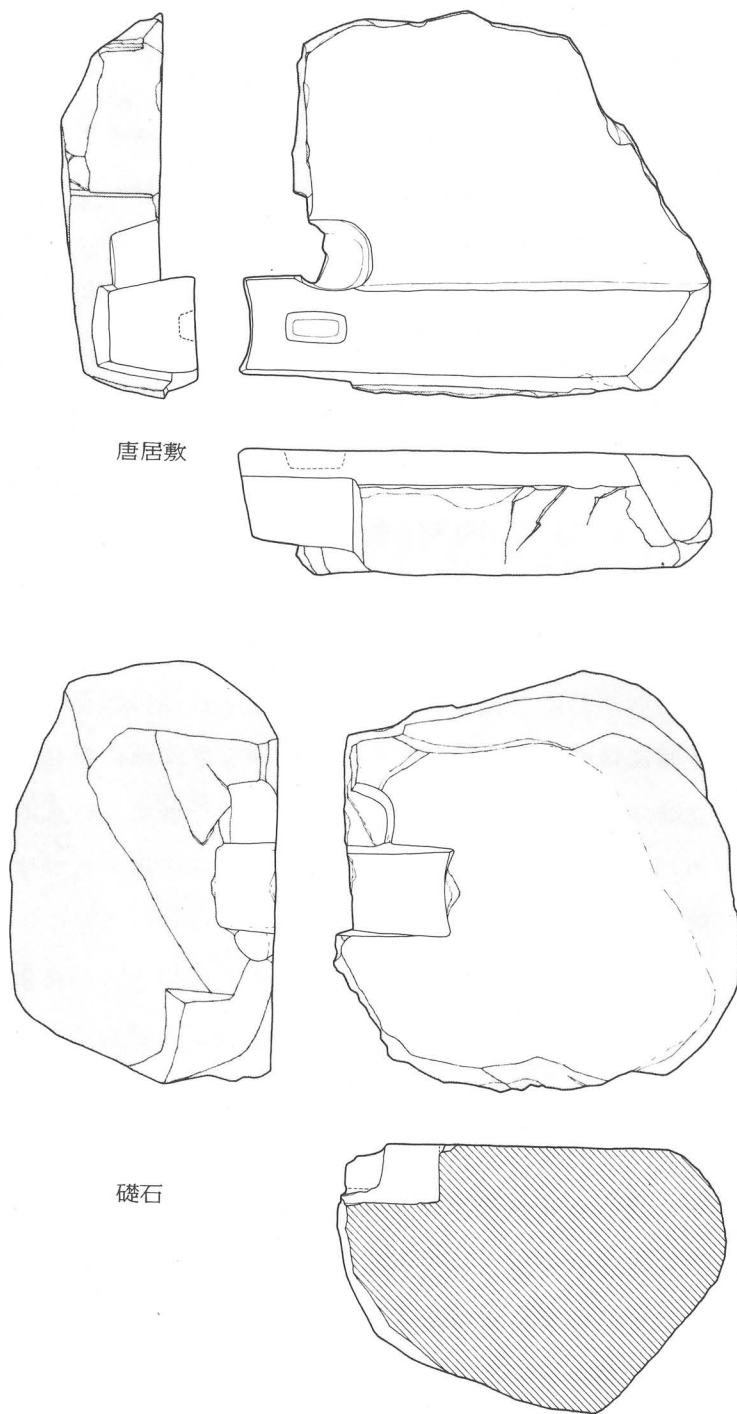


第5図 第37次調査遺構配置図(1:300)

20～30cmの自然石を詰めている。また二の柱痕跡は掘形の底に25cmほど不等沈下した形跡をとどめている。この掘立柱塀の大垣のとぎれている北側が西面中門にあたる。宮の東西中軸線は今回検出した大垣北端の柱掘形Ⅰの北15.2mの位置に想定されるので、この距離を北に折り返すと、南北30.4mとなり、これまで明らかにしてきた宮城門(桁行5間、総長25.1m、柱間17尺5.02m)と同

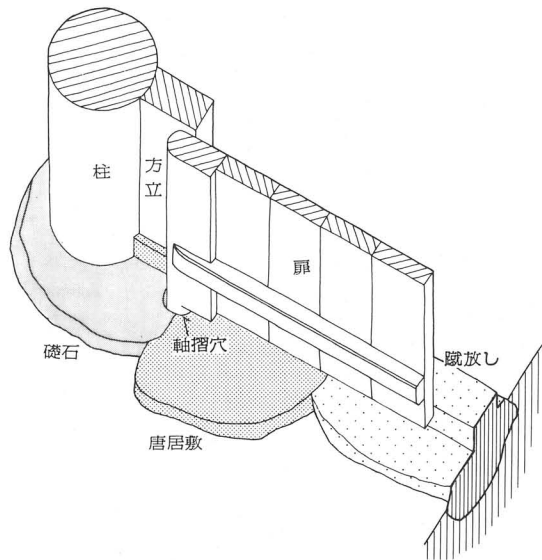
じ平面規模を持つ門
がこの間に存在した
と考えられる。

西面中門 門の遺
構は、後世の著しい
削平のため、基壇な
どの痕跡をとどめて
いなかった。しかし
幸いなことに、今回
初めて、門に使用さ
れていた礎石および
扉をとりつける唐居
敷（からいしき）を
発見した。この両石
はいずれも門に据え
られた原位置にはな
く、唐居敷は外濠が
用水路として機能し
ていた時期（9～10
世紀）に外濠に落と
し込まれ、礎石は外
濠が埋まった後（13
世紀初頭）に、水田
耕作の障害になるた
めか、土壌SK3423
を掘って落とし込ま
れていた。礎石（長
さ133cm、幅138cm、



第6図 唐居敷・礎石実測図（1：25）

厚さ87cm)は平坦に加工した上面の一端に、唐居敷と組み合わせるための方形の仕口(長さ28cm, 上端幅30cm, 下端幅27cm, 深さ20cm)をうがち、その脇に軸摺り穴(じくずりあな)の半分を掘りくぼめている。唐居敷(長さ145cm, 幅128cm, 厚さ40cm)は上面の片側に蹴放し(けはなし:長さ147cm, 幅28cm, 高さ11cm)を、その長辺の一端に、礎石と組み合わせるための断面逆台形の突出部(長さ24cm, 上面幅30cm, 下面幅23cm, 厚



第7図 唐居敷・礎石組合せ図

さ29cm)を造り出している。この先端は柱の円弧にあわせた凹面となっており、上面には方立(ほうだて)の柄穴(長さ20cm, 幅10cm, 深さ6cm)がある。方立柄穴がうがたれた部分の蹴放しの脇下面には軸摺り穴(復原下底直径18cm)の半分を掘りくぼめている。礎石および唐居敷はいずれも花崗閃緑岩を加工したものである。

今回出土した礎石と唐居敷は、その軸摺り穴の位置からみて、直接には組み合わない。しかし、同様の仕口を持つ礎石と組み合わせて使用されたことは明らかであり、このような構造をもった唐居敷は類例をみない。西面中門には、中央3間に扉がつき、この扉は内開きであると考えられる。従って、今回出土した礎石は3つの扉のうち、右扉口の右側の柱位置に据えられたことになる。また唐居敷の位置は不明であるが、出土位置からするとやはり同じ右扉口の左側の礎石と組み合うものであった可能性が高い。

西面外濠 S D 260 西面大垣 S A 258 の西方に掘削された南北大溝であり、総長22mを検出した。外濠の上面は灰褐色砂質土におおわれ、その下に暗灰褐色粘質土、黒褐色粘質土と続く。これらの土層は水平堆積している。さらにその下に小石を多く含む暗褐色砂質土があり、最下層は暗灰色粗砂である。濠堆積

層の下半部の状況は、たび重なる堆積・浸蝕作用のために複雑な様相を呈している。西面外濠は宮廃絶後も流路として機能しており、氾濫や水流による浸蝕のために、幅はかなり広がっている。外濠の西岸は調査区の北端でいくぶん西に寄っている。これに対して、東岸は著しく浸蝕され、大垣の西13m近くまで広がっている。このため設定当初の外濠の幅は確定できない。しかし、外濠底の両岸寄りに低い段があり、ほぼ南北に通る。この幅が3.5~4.5mであることから、濠の幅は東面外濠の幅5.5~6.0mに近いものと考えられる。また西面大垣と西面外濠との心々間距離は21m前後と推定されるが、この距離は、今回の調査区の北100mで行なった西面大垣・濠の調査（藤原宮第23-5次）結果ともほぼ一致する。外濠の深さは214cmである。外濠底の標高は北端が66.26m、南端が66.46mであり、北端が南端より20cm低い。

藤原宮廃絶後の遺構

シガラミ SX 3443 外濠 SD 260 がある程度埋まった後に、濠の底面に南北方向のシガラミが設置されている。このシガラミは杭（直径5~6cmの自然木の先を尖らしたものを）を外濠の底の堆積土に50~60cmの間隔で打ち込み、この杭に小枝を横方向にからませ、その上に板・枝・廃材等を、杭の西側にそって渡し、さらに西側から、この板をはさむように杭を打ち込み固定したもので、濠の西岸を護岸する施設であったと考えられる。

杭列 SX 3445・3446 外濠 SD 260の北寄りの底面に設けられた南北方向の2列の杭列（東側 SX 3445, 西側 SX 3446）。外濠底の地山面に杭（一辺8~9cmのヒノキの割り材で先を尖らしたものを）を60~70cm間隔で打ち込んだもので、本来は横板や枝を渡していたのであろう。東側に4本、西側に5本あり、一連の施設とみられる。外濠があまり埋らない時期のシガラミと考えられる。

橋脚 SX 3444 外濠 SD 260の底のやや東寄りに打ち込まれた柱根（残存長140cm, 直径23cm）である。先端を尖らし、外濠の底の地山面より42cm上までは縄掛けの割り込みや、はつきり痕を良好にとどめているが、その上25cmは腐蝕して少しやせほそっていることから、この柱は外濠が少し埋った後に外濠の底に打ち込まれたと推測される。柱根は1本しか検出されなかったが、藤原宮北面

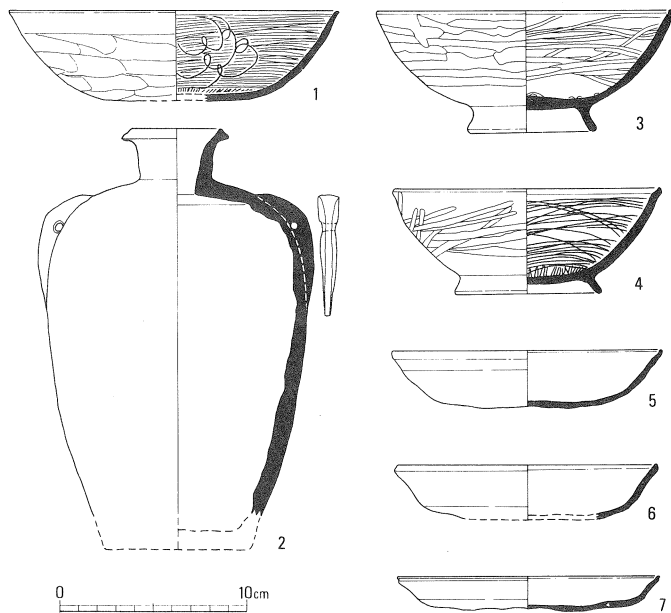
中門の前の北面外濠で検出した橋脚の設置位置（藤原宮第18次調査）から考えると、今回検出した柱根は藤原宮の廃絶後に設置された橋の橋脚であった可能性が高い。

井戸SE 3440 調査地区の北壁寄り、外濠SD 260の東岸にある内法76cmの方形横板組の井戸。井戸側は厚い板（長さ28cm，幅25～28cm，厚さ5cm）を井籠組にし、3段積みあげたもので、底に礫を敷き詰めている。井戸掘形は隅丸方形で、一辺約130cm，深さ65cm。井戸の中からは9世紀末の土器、銭貨2点（隆平永宝・貞観永宝）が出土した。

井戸SE 3441 井戸SE 3440の西側にある曲物・土釜組の井戸。井戸側は底をとった直径約35cmの曲物を3段積みあげ、その上に底部を抜いた土釜を据えている。下一・二段の曲物は上方にタガをまわしている。掘形は円形で直径約73cm，深さ50cm。井戸の中から10世紀後半の黑色土器の完形品が1点出土した。

井戸SE 3442 調査地区の南壁寄り、外濠SD 260の西肩部にある曲物組の井戸。井戸側は底板をとった曲物を2段積みあげたもので、下段の曲物は円形（内径33cm，器高26cm，上・下端部にタガをまわしたもの）で、上段の曲物は楕円形（36cm×52cm，器高12cm）である。掘形は不整形で、50cm×75cm，深さ149cm。井戸の中から削り掛け2点，ヒョウタン1点が出土した。

土壇SK 3423 外濠SD 260の東岸にある，礎石が出土した円形土壇。直径は約200cm，深さ70cm。礎石は上面を北側にし，斜めに落とし込まれている。



第8図 土器（1：4，1・3・4は黑色土器A類 2は灰釉陶器
5～6は土師器， 1～3：SD260 4：SE3441
5～7：SE3440）

土壙 SK 3422 土壙 SK 3423の東側の不整形土壙（230 cm×250 cm，深さ12 cm）。中から礎石の破片が多数出土した。いずれも腐蝕して崩れやすい状態であるが，本来は一個体の礎石であったと考えられる。



第9図 軒平瓦 6663 I (1:4)

土壙 SK 3420 大垣の西側の東西に長い土壙（360 cm×700 cm，深さ134 cm）。この土壙は西側の東西方向の溝 SD 3431 に連なっている。中から多量の瓦と礎石破片が出土した。

土壙 SK 3421 土壙 SK 3420 の北側の楕円形土壙（東西430 cm，南北290 cm，深さ116 cm，断面摺鉢形）。中から土器片が出土した。

これらの土壙は11世紀以降に，耕作の障害になる礎石・礎石破片・瓦等を投棄するために掘られたものである。

溝 SD 3427～3430 外濠の東岸にある東北方向に蛇行している溝（幅約60 cm，深さ21 cm）で，外濠がほぼ埋った後にできた溝であり，11世紀頃にはすでに埋没している。土壙 SK 3420 により，これらの溝の一部が掘りとられている。埋土中に遺物は含まれていなかった。

溝 SD 3431 外濠の東岸にある東西方向の溝で，溝 SD 3427～3430 および土壙 SK 3420 にその一部を掘りとられている。中から奈良時代の土器が出土した。

遺物

出土した遺物には土器類・瓦埴類・木製品・金属製品・銭貨・木簡等がある。

外濠 SD 260 から出土した土器には弥生式土器，土師器，須恵器，黒色土器，施釉陶器（緑釉・灰釉）があり，弥生時代から平安時代にわたっている。また外濠を覆う遺物包含層や，素掘りの細溝からは，わずかであるが瓦器類が出土しており，その中には鎌倉時代に下るものも含まれる。これらの土器の大半は奈良時代前半期（平城宮土器Ⅱ・Ⅲ段階に相当する）のもので，それ以外の時期の土器は少ない。墨書土器は記号様のもを含めると49点出土した。そのおもなものを示すと，奈良時代の土器に墨書されたものに「宮」，「三合」，「麦」

「咄」，「吉」，「太」，「南□」，「末」，
 「富」，「家」，「下」，「藏」，「田」，
 「白万」などがあり，とくに「宮」が6点あ
 るのが注意される。平安時代のものには「中」
 2点，「上」1点などがある。

土製品には円面硯2点，ミニチュアの竈3
 点，土馬4点がある。また器高2.6cmの小型
 の黒色土器（B類）壺1点が井戸SE3440か
 ら出土している。

瓦はほとんどが藤原宮所用瓦であり，軒丸
 瓦7型式17種，軒平瓦7型式19種が含まれる。
 この他，土壙SK3420からは奈良時代の瓦が
 3型式3種出土している。その内訳は次のと
 おりである。

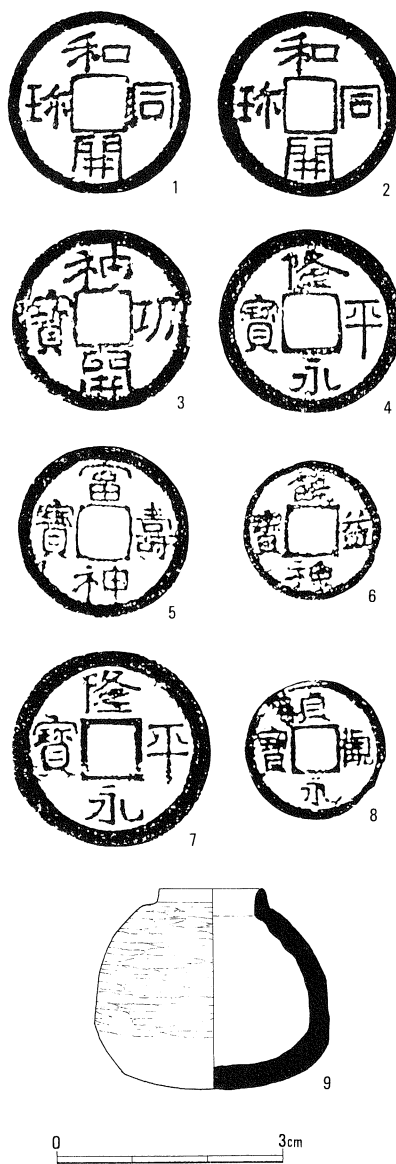
藤原宮所用軒平瓦 6233Aa・6233B・6273A
 ・6273B・6273C・6274Aa・6274Ab・6274Ac
 ・6275A・6275D・6278A・6278B・6278D
 ・6279A・6281Aa・6281Ab・6281B

同軒丸瓦 6561・6640・6641・6641C・6641
 F・6641G・6641I・6642A・6642C・6643Aa
 ・6643B・6643C・6646B・6646E・6646F・
 6647C・6647D・6647E

奈良時代の軒平瓦 6663I・6680・6802A

これらの軒瓦の他に丸瓦・平瓦・面戸瓦・熨斗瓦，埴等が出土している。また
 丸瓦の凹面の一端に「土作□ 右部□」と刻書（焼成前）されたものがある。

木製品には人形1点，削り掛け10点，多足机1点，曲物2点がある。井戸S
 E3422から出土した削り掛け2点には，圭頭の両側縁に切り込みがない。多足
 机は天板の破片のみで，シガラミSX3443に使用されていた。残存長66cm，幅



第10図 錢貨・黒色土器小壺
 (1～6：SD260，
 7～9：SE3440)

32 cm, 厚さ 1 cm で, 木口から 4 cm のところに高さ 1.5 cm, 幅 6 cm の台形の脚座を作り出し, この上に脚をさし込む方形の柄穴 (1.5 cm × 2.5 cm, 深さ 1 cm) をうがっている。この柄穴は現在 7 ケ所残っている。類似の多足机が平城京西市跡から出土している。また正倉院の宝物の中にもある。

金属製品には帯金具 (巡方裏金具か) 1 点, 鉄釘 7 点, 鉄棒 (長さ 36.5 cm, 直径 0.6 cm) 1 点がある。

外濠 S D 260 から出土した銭貨には和同開珎 3 点, 神功開宝 1 点, 隆平永宝 1 点, 富寿神宝 1 点, 饒益神宝 1 点がある。この他に井戸 S E 3440 からは隆平永宝 1 点, 貞観永宝 1 点が出土した。

外濠 S D 260 からは 2 点の木簡が出土している。そのうちの 1 点は上下端を欠いているが, 「見奴久万呂」と読める。人名の一部であろうか。他の 1 点は判読不能である。

石製品には砥石 7 点, 石匙 2 点, 石庖丁 3 点がある。また土壙 SK 3420 から古墳時代の鍬形石の破片が 1 点出土した。

まとめ

今回の調査によって, 西面中門基壇等の確認はできなかったが, 大垣の位置から門の存在を明らかにすることができた。その規模は, すでに検出している宮城門 (南面中門・北面中門・東面北門) と同じであることが判明した。さらに, この門に使用されていた唐居敷と礎石を発見したことによって, 宮城門の構造の復原に貴重な資料を加えることができた。

西面外濠は, 藤原宮廃絶以後 10 世紀末頃まで用水路として機能しており, 近辺に井戸が掘られるなど, 人々の生活の場となっていた形跡が認められる。特に外濠からは奈良時代前半期の土器が多量に出土しており, その中に「宮」と墨書された墨書土器が 6 点も含まれること, またミニチュアの甕形土器・土馬・人形・削り掛け・多足机・銭貨が出土していることなどは, 藤原宮廃絶後のこの近辺の荘園あるいは集落の様子を知る有力な手がかりとなるであろう。10 世紀末には西面外濠は埋没しており, それ以後, この周辺は水田となったと思われる。

3 藤原宮南面外周帯の調査（第37－6次）

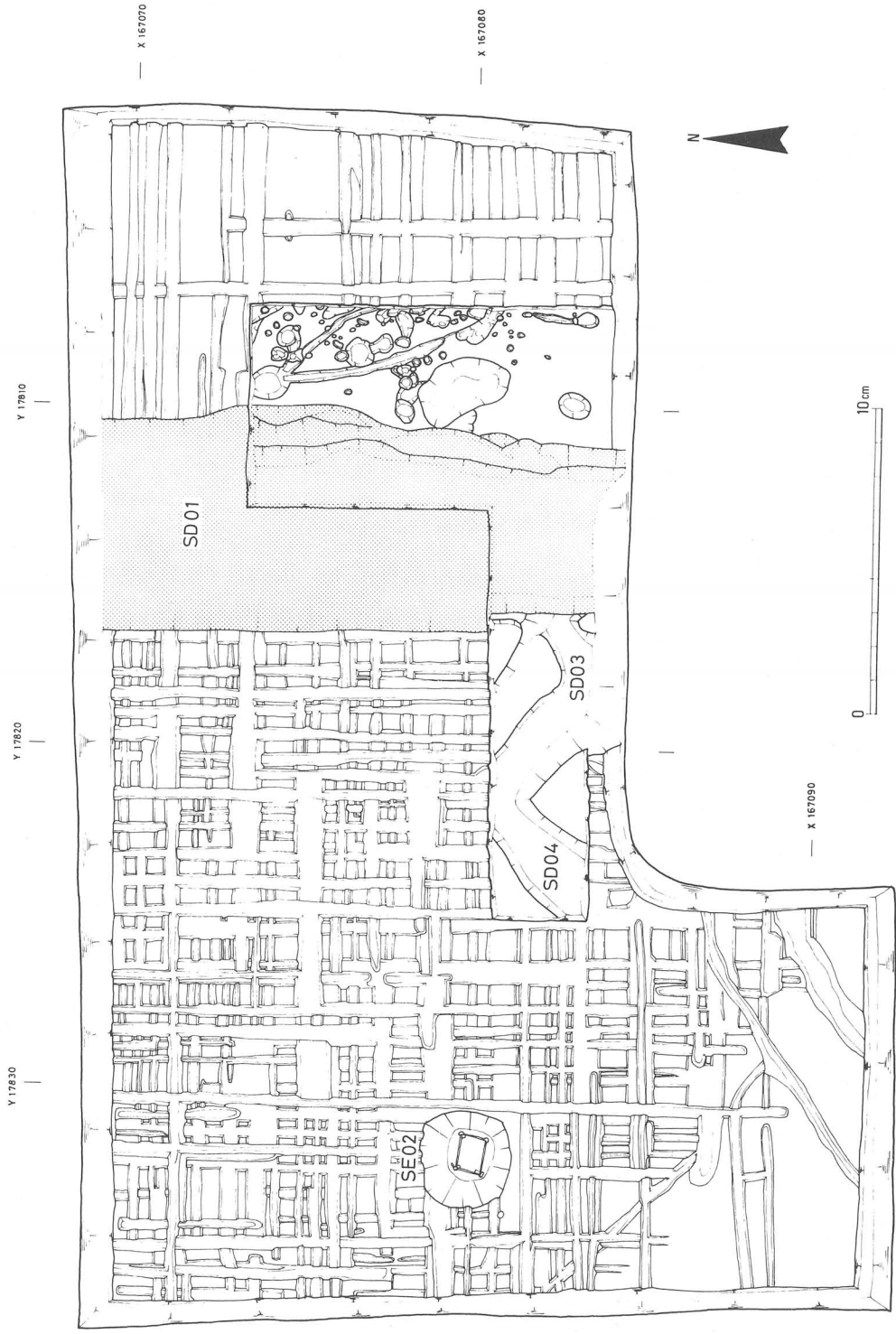
（昭和58年8月～9月）

この調査は、橿原市飛驒地区都市再開発計画の一環である児童公園の建設に伴い実施したものである。藤原宮は、南北12条、東西各4坊の条坊が復原されている京域の北半中央にあり、宮域は、南北を六条大路と二条大路で、東西を東西二坊大路で囲まれた4条4坊を占めている。宮域の四周を画する外郭施設は、宮城門の開く大垣と、内濠、外濠とで構成される。この外郭施設と、宮周辺の条坊道路との間には、建造物の稀薄な、幅の広い空閑地（宮外周帯と仮称している）が設けられており、後の平城宮や平安宮の宮垣とは、かなり様相を異にした状況が明らかにされつつある。今回の調査対象地は宮南面外周帯にあたり、さらに六条大路北側溝の想定位置をも含めて調査地を設定した。

遺構面は、現地表（水田面）下約60cmの深さであり、中世に属する素掘りの細溝が縦横に遺存していた。これは水田経営に伴う暗渠排水にかかわる遺構と考えられ、低湿地であるせいか、とくに調査区西半部には濃密に分布していた。

同じ遺構面上で、調査区東半部のほぼ中央に、幅5～6mの南北溝（SD01）を検出した。溝底は幅3～4mの平坦面をなし、溝の断面形は逆台形を呈する。深さは遺構面から1.4mあり、粘土やシルト、細礫を混えた砂などが互層に堆積していた。溝埋土から出土した遺物は、量的には弥生式土器片（第三様式を主体とする）が多いが、その他に祭祀用の木製模造品の一つである削り掛けや7世紀末前後に属する土師器、須恵器片も若干含まれている。また溝底からは丸・平瓦の破片も出土している。これらの瓦片はほとんど摩耗しておらず、製作技法からみると、藤原宮所用の瓦とほぼ共通している。この溝は形状や正南北方向に流れていることなどから、人工の溝と考えられるが、出土遺物により掘削の年代を限定することは難しい。しかし、後述するように、宮南面外濠などとの関係からみると、藤原宮・京と関連したものと判断することができる。

南北溝SD01の西方約18mの地点に、井戸SE02を検出した。井籠組の井戸



第11図 第37-6次調査遺構配置図 (1:200)

枠が残っており、一辺の長さは東西95cm、南北75cmと、やや長方形を呈する。井戸の底は、遺構面下2.6mにあり、拳大の円礫が敷き詰められていた。埋土に含まれる遺物は少なく、弥生式土器片の他に、7世紀末頃の土器片があり、それより新しい時期に属する遺物はない。

中世の細溝群や南北溝SD01、井戸SE02を検出した遺構面を形成する土層は、弥生式土器畿内第五様式の土器片を多量に包含する暗褐色粘質土層であるが、この下層に弥生時代の遺構の存在が予測されたため、調査区の一部をさらに掘り下げて、遺構の検出をはかった。その結果、厚さ約70cmの包含層の下に、溝や小穴群を確認することができた。

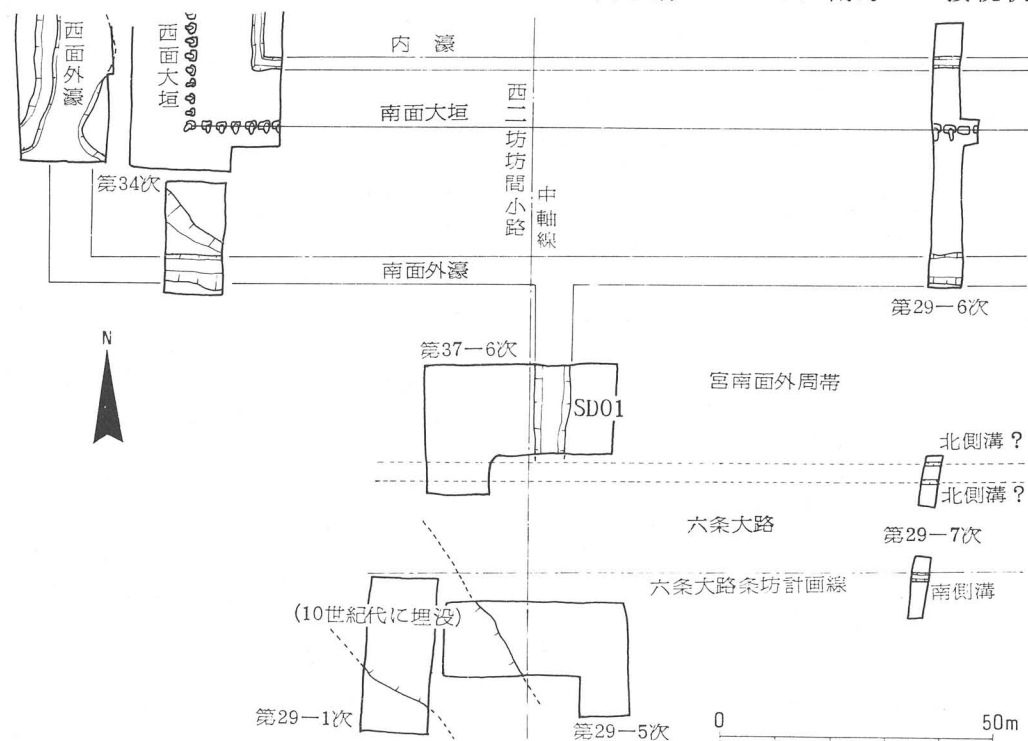
南東から北西方向に斜行する溝SD03は、調査区の南端で藤原宮期の南北溝SD01により切られるが、幅約3m、深さ1.4mの流路である。このSD03に直交するかたちに接続する、ほぼ同規模の斜行溝SD04とともに、埋土には第三様式に属する弥生式土器が多量に埋没しており、完形に復原しうる甕や鉢も10個体近く含まれる。SD03、SD04ともに溝の断面形はおおむね逆台形を呈する。また、南北溝SD01の東岸にあたる下層遺構面では、同じく第三様式に属する多数の小穴や不整円弧状の細溝を検出した。小穴の中には、穴が傾斜するものや、深さが50cm以上に及ぶものもある。これら弥生時代の遺構群は、この地域に、弥生時代前期から後期にかけて存続していた集落、四分遺跡の一部をなすものと考えられる。

調査の日時の大半は、中世素掘り溝の検出に費されたが、調査の終りに近づいた時点に至り、南北溝SD01の存在が確認され、藤原宮造宮のあり方を復原する上で、注目すべき知見を得ることができた。

南北溝SD01は、条坊地割の上では、西一坊大路と西二坊大路のほぼ中央に位置する（より正確に言えば、SD01の西岸線が西二坊坊間小路の中軸（条坊計画）線と、±1mほどの誤差内で一致するとみてよい）。藤原宮が営まれていた時期に、宮外周帯上に坊間小路が通じていたとは考えがたいが、従来の調査研究の結果、宮域内の各所で、宮の造宮に先立って造設された、京条坊地

割に合致する道路遺構が確認され、それらは宮の建設時には埋め立てられていたことが明らかにされている。この“宮域内先行条坊道路”のうち、西二坊坊間小路にあたる道路遺構は、すでに藤原宮第5～9次調査で、五条条間小路との交叉点を含んで約110mにわたり検出されており、東西両側溝とも幅約1m前後、側溝心間距離6.25～6.56mの規模であることが確かめられている。この先行条坊の西二坊坊間小路は、今回の調査地内においても、当然存在していたはずであるが、西側溝は遺存していない。後世の削平をこうむったのであろう。東側溝が、その想定位置にある南北溝SD01であったとすると、その規模が大きいため、復原される実質路面幅は2.6mほどとなり、あまりに狭い。こうしたことから、宮の造営に際して、先行条坊道路である西二坊坊間小路の側溝のうち、西側溝は埋め立てて廃する一方、東側溝を拡大掘削したことが考えられる。南面外濠と南北溝SD01の幅がいずれも5～6mと同じであり、溝の形状が共通していることも、上の想定の一助とみなすことができよう。

こうして、宮造営に伴い新たに掘削された南北溝SD01は、南方への接続状



第12図 藤原宮西南地域遺構配置図

況は不明であるが、おそらく、宮南方の基幹排水路としての機能を果たしたもので、六条大路をはじめとする周辺の条坊道路の側溝の排水を集め、南北幅約23m（推定）の宮南面外周帯を横断して南面外濠に注いでいたのであろう。この想定合流点の西方約60mで、南面外濠とL字形に接続すると考えられる宮西面外濠は、他の外濠より大規模につくられており、宮の西辺に沿って北流し、宮の西北角で流路を北西に変えたのち、再び正北方へ流下することがすでに明らかにされている。この西面外濠の規模が特に大きいことについての理由は、これまで必ずしも明確にされていない。しかし、南北溝SD01の存在が確認されたことにより、西面外濠は、宮域内からの排水だけでなく、宮周辺の京内からの排水——単に生活污水にとどまらず、むしろ最も重要であったのは降水や自然湧水の処理であったと思われるが——をも合せて処理するという役割を担っていたと考えることができる。こうしたことは、宮および京の建設にあたって、きわめて周到な都市計画が企画されていたことを如実に示すものであろう。

以上、今回の調査の成果について、若干の所見を記したが、調査当初予測された六条大路北側溝は確認しえなかった。前述の西二坊坊間小路ともども、後世の水田耕作などにより削平されたと判断される。このように、南北溝SD01と六条大路あるいは宮南面外濠との接続状況は、まだ不明であり、今後ともさらに綿密な発掘調査研究を推進していく必要がある。

4 （藤原宮）その他の調査概要

a 宮西南地域の調査（第37－2次）

（昭和58年5月）

この調査は道路拡幅工事に伴う事前調査として橿原市四分町で行なった。調査地は藤原宮域内の西南部にあり、宮域内先行条坊道路である西一坊大路の想定位置にあたる。調査は幅3mのトレンチを114mにわたりL字形に設定して実施した。現水田耕土、床土の下には砂礫層や細砂層が堆積し、繰り返し流水

に洗われたことを示している。明確な遺構には、調査区中央付近で検出した幅20mあまりの、7世紀初頭頃まで存続したとみられる大溝や、それに北接する幅10mの、畿内第五様式に属する弥生式土器を多く含む溝がある。いずれも東南から西北方向に流れている。藤原宮に関わると判断しうる遺構はなく、旧流路の浸蝕作用等により削平されたのであろう。

b 西方官衙地域の調査（第37－5次）

（昭和58年8月）

この調査は駐在所の新築に伴う事前調査として、橿原市縄手町の鴨公小学校の北に隣接する地点で行なったものである。調査地は藤原宮大極殿の西約270mにあり、宮内西方官衙地区の一画と推定される場所で、同時に宮域内先行条坊道路である西一坊大路の想定位置にもあたる。調査は東西7m・南北3mの21㎡を対象とした。調査地の現地表土は宅地造成のための整地土であり、地表下1.4mで旧水田耕作面に至る。厚さ20cmの水田耕土の下は黄褐色粘土層からなる地山であり、この地山面上で、東南から西北方向に流れる、幅3.5m、深さ0.6mの溝を検出した。溝の中には砂や粘質土が層状に堆積しているが、遺物は全く含まれていない。藤原宮に関わる遺構は遺存しておらず、おそらく、宮造営当時の地表面はかなり著しい削平をこうむったものと考えられる。

c 東方官衙地域の調査（第37－11次）

（昭和58年10月）

この調査は駐車場用地造成に伴うもので、東西2m、南北5mの10㎡を対象とした。調査地は藤原宮大極殿の東約400mにあり、近年、継続的な調査を通じて明らかにされつつある宮東方官衙地区の一画にあたる。調査区の土層層序は水田耕土の下に灰褐色砂質土よりなる床土があり、その下は現地地表下30～40cmの平坦な地山面となる。地山面は灰褐色シルト層により形成されている。この地山面では、東西・南北方向の幅約20cmの素掘り細溝が6条確認されたにすぎず、建物等に関わる遺構は遺存していなかった。